

山に親しみ山に想う(24)

—小さな探検・ドングリの苦惱—

<文・写真>岡本

2019年9月末にドングリの豊かな奥多摩・榎(かや)ノ木尾根を歩いた。ドングリを袋一杯に拾い、孫が世話になっている保育園に提供して大変感謝された。ドングリは全園児に分配され、その次に孫を迎えに行った際に、可愛い園児から可愛い「ありがとう」の合唱で迎えられた。園児は、「どんぐりころころ どんぶりこ…」と童謡を上手に歌えるのだが、そのドングリを触ったことがないというのだから、本当に嬉しかったはずだ。爺さん冥利に尽きる福とはこんなことだろう。

古希を超えた今でも、街路樹に落下しているドングリを見つけると、2、3個そっとポケットに入れる。ドングリを手の平でもてあそぶ時の感触が好きだし、幼い頃の郷愁に浸るような心地になれて豊かな気持ちになる。

2011年1月末に秦野駅から震生湖、渋沢丘陵、頭高山を経て渋沢駅に至るコースを歩いた。天気に恵まれて丹沢山塊の雄大な景色を望み、関東大地震でできた堰止湖の震生湖を周回し、丘陵南麓の畑と果樹園の豊かさに感銘し、落ち葉を踏んで暢んびりと歩いた散歩のような山行であった。また、石仏、石塔、馬頭観音などが丘陵の道に密度濃く点在し、往時の人々が物なり豊かな中で営為していたことが想像された。



渋沢丘陵の西端にある栢窪集落を過ぎ、頭高山入口近くになると、山道脇にドングリが目立ち始める。大木の陰の湿り気を含んだ地面にドングリが10粒ほど散らばっている。その内、4粒が芽(根)を出そうとしており、果皮が裂けていた(写真①)。



これまでも果皮が裂けて発芽(根)し始めているドングリを何度か見つけたことがあったが、直径30cmの狭いところに4粒も発芽(根)し始めていることに惹かれ、屈んで顔を近づけて見た。4粒のうちの1粒が赤い果肉の先から一筋の手(根)を伸ばして、その先が地面に突き刺さっていたのだ。しかも、ドングリの本体の堅果(種子)が1cmほど地面から宙に浮いていた(写真②)。

これは驚き、自分にとって発見だ。発芽(根)する場合、ドングリの上部の尖った先から芽(根)が出るにしても、地面には堅果(種子)のギザギザ模様のある殻部から手(根)が出て地面に突き刺さると思っていた。それが想像とは異なり上部から出た芽(根)が半回転して堅果(種子)を宙に支えた状態で地面に突き刺さっていたのだ。

地上に落下したドングリの運命は厳しいだろうと、素人ながらも容易に考えられる。先ず、落下すれば発芽(根)までにゾウムシなどの虫に卵を産みつけられて死に体になってしまったり、リスや猪に喰われてしまうかもしれない。発芽(根)するためにどの程度の雨滴(湿気)が必要なのか、更にどの程度の陽光が必要なのか知らないが、運良く発芽(根)しても、落下点がセメント上であったり、乾いた土壌の上であれば、硬くて半回転して突き刺さることはできない。大きな落ち葉の上にも落ちて不運である。突き刺さるためには、適度の水分が供給され、適度の柔らかい土壌の上に落下する必要がある。幾つもの要素の過不足ない調和という環境が整わなければならない。発芽(根)して逆立ちした後の生育はどうなるのかネットで探って調べたところは、次のようである。「コナラの林は、冬に葉を落として日光が地上に届く。この時期、地中に根を伸ばし、逆立ち



ちの状況で春になる。春に木々の枝から新芽が伸び、林が緑に覆われ地上に届く日光が柔らかな陽射しに変わる『適度に明るい木漏れ陽』が注ぐ頃、新芽を伸ばし始める。上方に伸びる新芽は、これが不思議なことに、下方の土壌に伸びた根(逆立ちを支えている手)の途中(堅果と地表の間の部分)を引き裂いて発芽する(写真③)。

発芽した新芽は、直射日光に弱く、日光が強いと新芽は焼かれて枯れてしまう。」(この項より先で使った「新芽、手」は、根ということになる)

新芽(芽生え)から本葉を出しても、その先も幸運の女神の庇護を受けないと、実生が樹木にまで成長できる蓋然性は極めて小さいはずだ。こう考えると、逆立ちしたドングリを見つけても、写真を撮ったり観察するだけにして、珍しいからといって拾わないで欲しいものだ。われわれ人間以上に、ドングリの人生行路には波乱が待ち構えているのだから。

(了)